

新書紹介

建設はじめて物語

清水慶一 著

筑摩書房 百四十一頁 千七百円

一九九二年のある日、群馬県桐生市にある赤煉瓦倉庫「有鄰館」において「近代化遺産拠点都市宣言」記念シンポジウムが大勢の桐生市民と関係者の参加によって開催された。本書の著者である清水慶一さんは、パネリストの一人として参加されていた。「近代化遺産のすばらしさと桐生、群馬の位置付けについて、丁寧な市民のわかる言葉を選びながら話をしていた清水さんに、情熱に溢れた行動的な歴史家の姿を見たと思った。」当時の私の感想である。

清水さんは、国立科学博物館の理工学研究部主任研究官であり、全国の博物館でも数少ない建築史専攻の研究者である。肩書がいかめしいからといって本書が難しい学術書と思わないでいただきたい。本書は、建設業の社内報に連載していたものをもとめて「建設はじめて物語」として出版された。小粒だが内容が凝縮されており、読むほど

に楽しさが増してくる。例えば、「近代セメント」の書き出しはこうだ。「むかし建設現場で働いていたことがある。当時、まだ社会に出たばかりの私は、現場では何でも屋。建設材料の片付けから、掃除まで、雑用一切承り係といった役目をこなしていた。セメント、という言葉から、私は今も反射的に現場で覚えたザラザラした紙袋の風合いと、かつげばズッシリと背中にのしかかってくる袋の重さを感じ出してしまおう。」

また、「煉瓦」の書き出しは、「『三匹の子豚』という西欧のおとぎ話では、建築構造と耐久性について書かれていて、藁の家、木の家、煉瓦の家、の中では、煉瓦の家が一番丈夫である、という結末になっている。」というように、自分自身の経験や誰かがわかるおとぎ話から建設のはじめてをわかりやすく解説している。

「工場」の項では、日本では

じめてのラシャ工場をつくった井上省三の物語が書かれている。それまでの日本軍は木綿の制服を着ていた。外国の軍服はラシャであった。富国強兵の時代であり、外国に並ぶ軍服をつくるため、ラシャの製法をドイツに学ぶため旅立つのである。外国人である井上にラシャの製法は容易に教えてもらえない。井上はどうやってラシャの製法を学んだらうか。この先は、本書を読んでもいただきたい。まるでドラマのような展開がある。ともかくにも日本にラシャ工場、「千住製絨所」は井上の努力と大久保利通の援護により設立される。

本書の内容ではないが、「千住製絨所」ゆかりの煉瓦塀の保存活動をされていた市川謙作さんにお聞きしたところ、「千住製絨所」の跡地は、昔の東京球場や現在の都立荒川工業高校であり、「千住製絨所」の近くの土地に横倒しになって放置されていた大きな石が井上省三の碑であると、子供の頃、千住製絨所の跡地でよく遊んでいた商店の人が配達の際に発見し、区役所に連絡をとり、これがきっかけになって井上省三の碑はめでたく建て直されたとのことであ

る。ここにも、もう一つのドラマがあった。

本書の内容に戻ろう。目次には「近代セメント」、「煉瓦」、「駅舎」、「トンネル」、「運河」、「下水道」、「水道」、「近代製鉄所」、「工場」など18項目が並ぶ。横浜は、これら「近代」の「建設はじめて」に非常にわかりが深く、多くの項目に登場する。横浜をあらわすのによく使われる「進取の気性」というのも、外国の技術に触れ、日本ではじめてその技術を使い、新たな世界をつくり出した人々の気概から生まれてきたものではないか。清水さんは「まえがき」でこう語る。「・・前略・

この本の主要な舞台は、幕末から明治時代の初期の日本である。そして、この時代の日本は、こと西欧の技術や工業にとつて、全くのフロンティアであった。何一つ前例のないところから、日本の近代産業は興り、交通運輸のシステムは整備され、国土の開発は行われていったのである。本書は、近代的な施設建設の始まりや建設技術の始まりを中心として扱っている。しかし、筆者が伝えたかったもう一つのテーマは、現代技術のもととての姿、今日技術大国と称されて

いる我が国が、どのようにして西欧の近代技術を移植定着させたかという、初原の姿である。この部分を本書から読み取っていただければ筆者にとって、これ以上の幸せはない。」

さて、室町時代の能役者世阿弥は、「時々の初心忘るべからず」と説いた。私たちはいまこそ、先達に学び前例主義を排し（なにやら係長試験の論文風になってきたが・・）、時々の初心を生かしてこれからの横浜を考えていくべきであろう。職種を問わず、多くの職員に近代の横浜を、日本を、つくり出した先達の時々の初心の数々をぜひ読みとっていただきたい。

また、毎日新聞一九九四年五月二日の大江志乃夫さんの本書に対する評はこう結んでいる。「・・前略・一枚の銅鏡の発掘が古代の邪馬台国論争にもつ重みとおなじように、近代建設遺構をかたちづくる一枚の煉瓦が発信する情報を読み取る産業考古学の重要性を、本書から知ってほしい。」

もう何も言うことはないが、本書が千七百円とは、全くお得であると言いたい。

△企画局都市づくり推進課

内藤恒平▽